

論文

ジェンダーと経済学の限界

大矢野 栄 次

目 次

1. はじめに
2. 資源保有と活動成果
3. 社会的生産フロンティア・カーブの導出
4. むすびにかえて—経済学の限界とジェンダー—

1. はじめに

キングスレー・ブラウン著『女より男の給料が高いわけ』¹によると、行動遺伝学の分野においては、男女の性格についての形質の多くは遺伝性が高いことがわかっているようである。このことは、彼の著書において次のように説明されている。「幼児や子供を対象とした研究によると男女の典型的な行動が発達してくるのは極初期の段階である。それほど早いことは即ち、男女の違いが社会条件だけに基づいて説明されるべきではないということを物語っている」(参考文献1, p.52)のである。

また、人類学の研究においては、「われわれの社会で観察されている性差の多くは、文化を超えて全世界的に見られるものである。これらの一連の証拠はそれぞれの別個に得られたもので、観察された性差に生物学的な基盤があることを示

1 参考文献1 参照

している」(参考文献1, p.52)のである。

本論文は、この生物学の行動遺伝学の分野の成果を経済学において取り入れることによって、ジェンダーと経済学との関係について考察するものである。ここでの議論においては、長年、社会学者が議論してきたような、「性差はその人がそれぞれの社会や環境の中でやっていけるように躰けられたり、ルールを教えられたりする」という、社会化の方法と過程の相違から生ずる」との主張について再考察するものであるが、全面的に否定するものではない。なぜならば、これらの社会的要因は生産活動や消費活動、あるいは、資源配分や所得分配の過程において必然的に発生する相違であると考えることができるからである。

《論文の要約》

この論文の結論は、次のようなものである。①経済学の分野において分析される人間の活動は市場交換を前提とした財・サービスの交換として表されるものであり、人々の日常生活の全ての営みから現れる現象の極めて限られたものであることが、ジェンダー研究における経済学の限界の1つであること。また、②社会的価値基準を「男性的価値基準」と「女性的価値基準」とに分けて考えることができるとするならば、資本主義経済においては社会的な評価として、男性的活動の成果を高く評価し、女性的活動の成果を低く評価する傾向が市場取引において大きく現れることが説明されること²。それ故に、③経済学は人間行動の経済的側面だけを分析する学問であるという、経済学本来のもつ限界を理解することが重要であること。そして、④経済学的分析におけるこのような相対的評価は、決して人間一人一人について、男性か女性かの存在自身や活動の成果についての全評価ではないことを理解しなければならないのである。

2 このことは、直感的にも理解可能であるだろう。

2. 資源保有と活動成果

本論文においては、人が本来保有する資源は、男性的資源と女性的資源に分類されるとする。すなわち、人には、男女を問わず、二種類の資源が賦存すると考える³。また、それぞれの資源を利用して活動の成果を得る方法として男性的方法と女性的方法との2種類の技術的方法があると考える⁴。この技術的方法の差異とは、次のようなものであると説明することができる。

「仕事を選んでもよいという場合、男はより難しい仕事を選びがちなのに対し、女は簡単な方を選びがちである。さらに言えば、何か失敗すると女の方が諦めやすく、失敗したのは能力が不足していたからだとし、努力が足りなかったからだとは普通考えない。一方、男は、失敗の後には何らかの改良を加えようとする。」（参考文献1, p. 39）。あるいは、「男と女では優位行動にも本質的な差がある。エリノア・マコビーの観察によれば、男はごく小さい頃から「縄張り」と他者を支配すること」に興味を持ち、同様に女は社会の中で他人との関係をこじらせずにうまくやっていくことに興味を持つ傾向が見て取れるという」（参考文献1, p. 39）。また、男の場合、しばしばゲームのルールを巡って口論することがあるが、それが原因でゲームをやめてしまうことはない。・・・ところが女の子がルールを巡って口論すると、それでゲームがおしまいになってしまうことがよくある。そしてまた、男の子は女の子に比べると友だちと競争したり、気に入らないチームメイトとでも協力したりするのが得意である。遊戯も実際、女の子に比

3 社会的には、男性的資源をより多く持つ人が男性、女性的資源をより多く持つ人が女性と定義されるだろう。

4 一般的には、男性的方法による活動成果が相対的に効率的である人が男性、女性的方法による活動成果の方が効率的である人が女性であるということが出来るだろう。しかし、この男女の活動成果の差異は、社会的な環境のもとで、男女間の役割分担から異なった活動成果が生まれることも考慮しなければならない。

べると複雑だった。」(参考文献1, pp. 42~43)。そして、「女の子は競争よりも協力を、男の子は協力よりも競争を好むことが首尾一貫して見出されている。」(参考文献1, p. 43)。すなわち、「男の子の方が女の子に比べてずっとルールに則る性質が強い」ことを見つけているのである。

以上のような認識から、男性的技術と女性的技術の差異を要約すると、次のようなところに見出されるであろう。「男はリスクを冒しやすく、地位や財産を得ようとする傾向がある。1つのことに専念して目的を達成しようとする。一方、女は子供を育てることに熱心で他者に感情移入しやすく、社会の頂点に立とうとするよりは社会関係のネットワークを崩さないことのほうに重きを置く」⁵ (参考文献1, p. 73) と理解されるのである。

《活動成果フロンティア・カーブ》

このような想定のもとで、それぞれの個人にとっての日常活動から生み出される2種類の活動成果についての活動成果フロンティア・カーブ(可能性曲線)を導出することができると思う。図1と図2は、それぞれ生産フロンティア・カーブの導出過程を説明したものである。縦軸の上に向かって男性的活動成果の量を、横軸右に向かって女性的活動成果の量を測るとする。また、横軸左に向かって男性的活動の要素量を取り、縦軸の下に向かって女性的活動の要素量を取ると、第2象限は男性的技術による方法(男性的活動関数)、第4象限は女性的技術による方法(女性的活動関数)を表している⁶。

5 ビジネスの成功者は「リスクを侵しやすい者ほど、リスクから逃げがちな者よりも、財産や収入、地位や権威などの点でより大きい成功を収めている」(キングスレー・ブラウン著「女より男の給料が高いわけ」p. 77)。また、それ故にリスクを冒して負け犬となるのは圧倒的に男なのである。

6 男性的資源と女性的資源の区分は、生産物から定義されると考える。すなわち、男性的生産物を生み出す資源総体であり、女性的資源は女性的生産物を生み出す資源総体である。また、男性的生産物か女性的生産物かは社会的・歴史的に決定される側面が強いと考えられる。また、すべての財・サービスは男性的財か女性的財に分類可能であると仮定する。

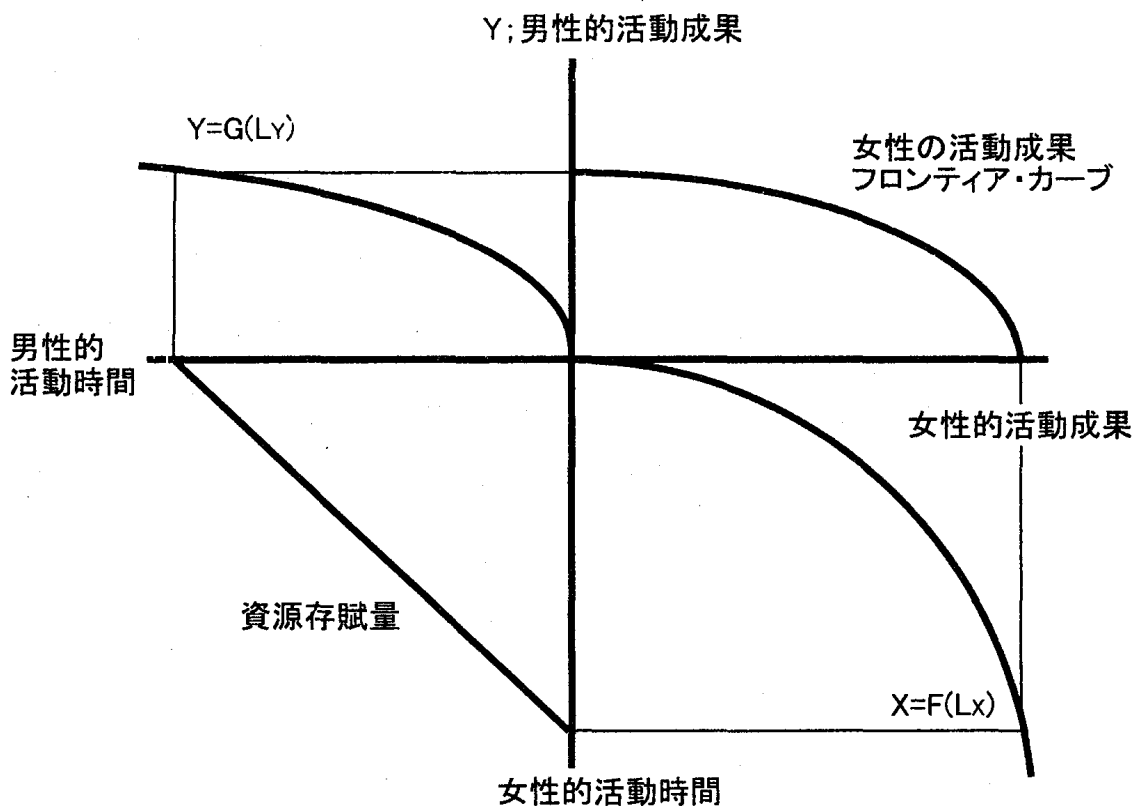


図1 女性の活動成果

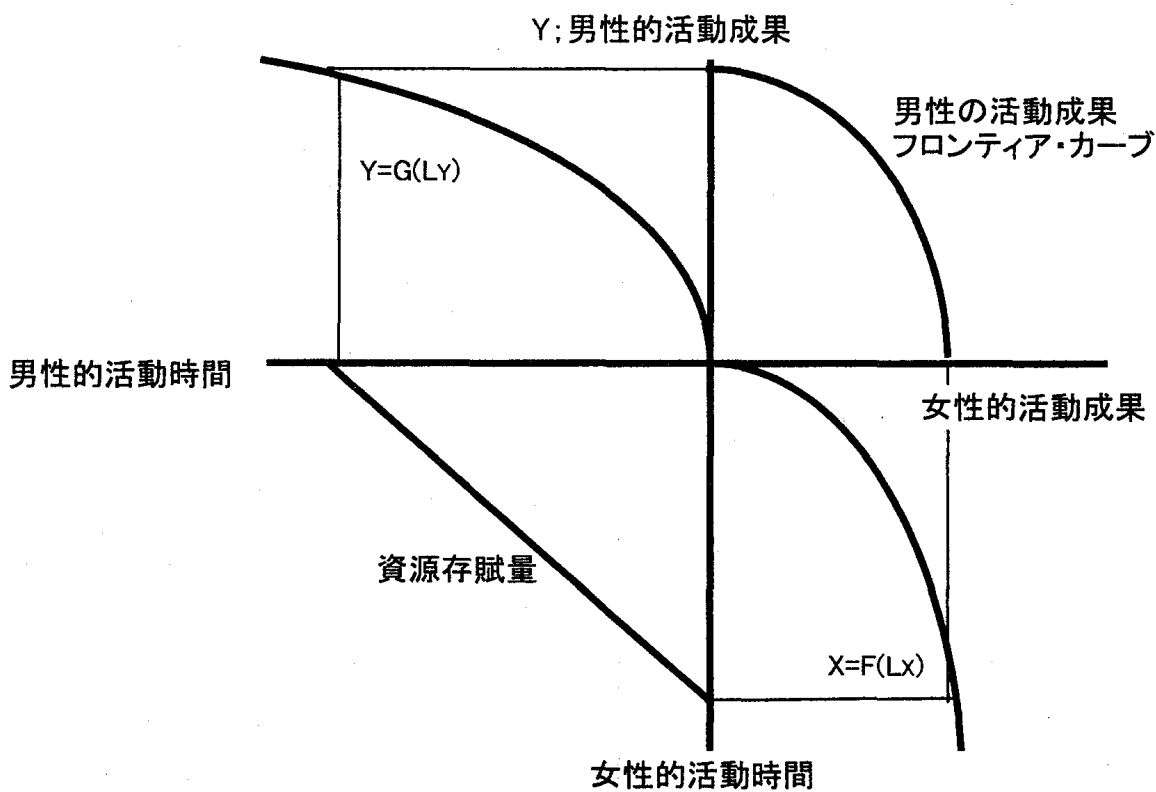


図2 男性の活動成果

生物学的に性差を論ずることができるならば、女性の活動成果フロンティア・カーブは図1のように、横軸の女性的活動成果に膨れたかたちで描かれ、男性の活動成果フロンティア・カーブは、図2のように、縦軸の男性的活動成果に広がったかたちで描かれると考えることができるであろう。あるいは、社会学的アプローチで説明するならば、縦軸の男性的活動成果に広がったフロンティア・カーブを男性の活動成果フロンティア・カーブと呼び、横軸の女性的活動成果が広がったかたちのフロンティア・カーブを女性の活動成果フロンティア・カーブと呼ぶと考えることができるであろう。

《男女の活動成果の評価についての格差》

以上で導出した活動成果フロンティア・カーブの男女間の相違から、各人の①物的生産能力についての男女格差とその②評価としての男女格差が存在することが説明される。

すなわち、①物的生産能力の差異とは、縦軸で表される男性的な活動成果と横軸で表される女性的な活動成果の差異である。これは絶対的基準によって客観的に表すことができる格差である。次に、②評価としての格差は、それぞれの活動成果についての相対評価による格差である。これは個々人の主体的な評価基準についての差異であり、個人によって異なるのが当然である。

図3は、図1の女性の生産フロンティア・カーブと図2の男性のフロンティア・カーブを同一の図に描いたものである。このRE線は、図3の場合の、この男女2人のそれぞれの活動成果点Aと点Bにおいて、等しく評価する場合の相対評価を表している。

ここでそれぞれの人にとって、自分が所属する社会において、男性的生産と女性的生産の両活動成果物についての相対的評価がREで表わされるとき、自分の活動成果である生産物の組み合わせが最大限に評価されるように、それぞれの資

源配分の組み合わせ方法を採用することが合理的行動であると仮定する。

いま、彼らが直面する相対評価がREの場合、点Aは男性の活動成果の組み合わせであり、点Bは女性の活動評価の組み合わせである。

しかし、この相対的評価を社会的評価として考察する場合には、この評価基準について次の2つの問題が存在する。1つは、社会に評価される財・サービスと評価されない財・サービスの差異の存在である。これは市場経済においては特に重要な差異となって現れ、男女間の評価格差やそれ故に所得格差となって現れる可能性が大である。もう1つは、相対評価についての相対性である。つまりあるグループは評価される活動成果が他のグループは評価されない活動成果である場合などである。

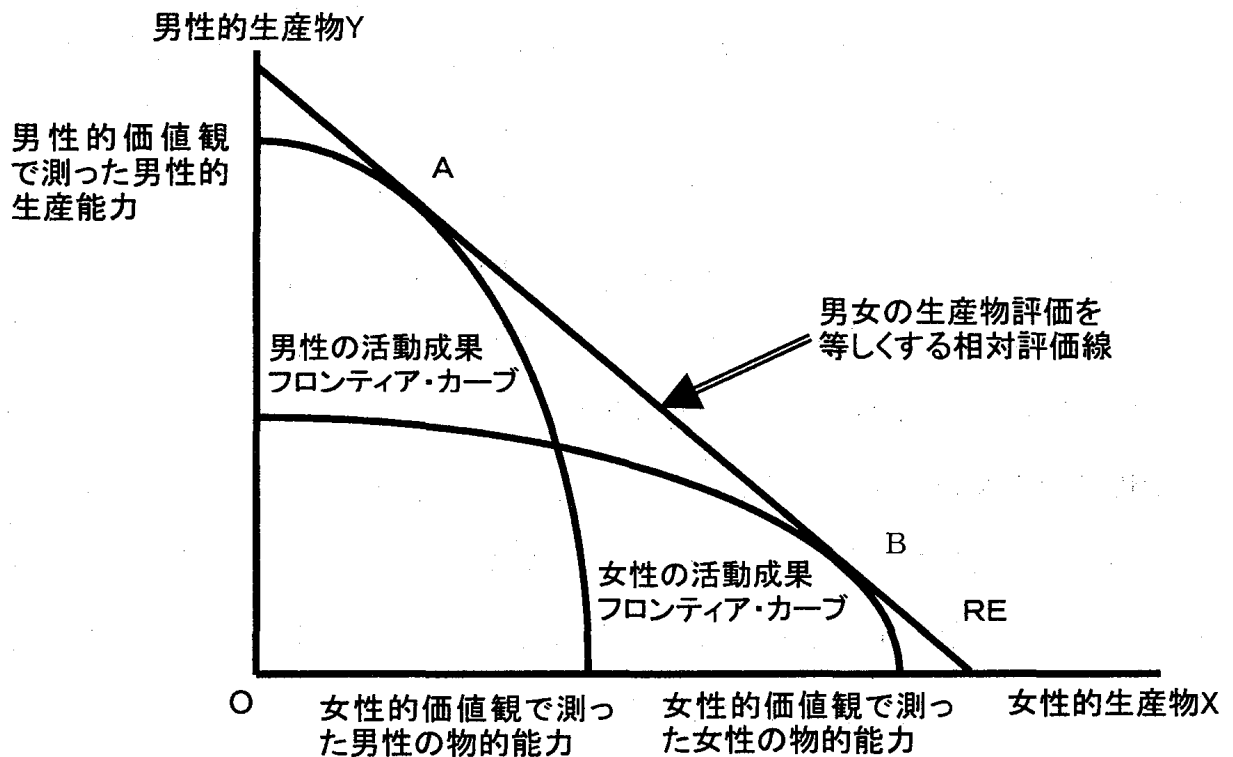


図3 男性と女性の能力評価格差

《男女間経済格差の源泉》

資本主義経済システムとは、資本主義的生産を背景として市場取引が実現され、その取引手段は貨幣によって決済されるシステムである。ここで、生産とは生産力の差異によって評価されるものであり、単純労働においては体力の差異として評価されると考えることができる。また、金融決済とは信用力を巡るシステムであり、男女間の生物学的差異が微妙に現れる世界であることが説明されるであろう。それは、家庭内とか特定のグループ内とは異なった、外交的世界における男性的価値観が基準となる世界でもある。

このようにして、資本主義経済は男性的能力が社会的に評価されるシステムであると考えられるならば、社会システム自体、とりわけ資本主義経済、が男女間の経済格差を助長する原因であると議論することができるかもしれない。

しかし、資本主義経済システムといえども、家庭内労働（家事・子育て）やそれらの仕事から派生するような福祉的な職種においては、女性の能力が相対的に高く評価される社会システムであることも、また明白である。

図4では、REM（男性的活動成果が相対的に高く評価される社会の相対評価）は今日の資本主義経済において成立する相対評価であると考えられる。もし相対評価がREF（女性的活動成果が相対的に高く評価される社会の相対評価）であるならば、この社会は女性的価値観の方が相対的に高く評価されるために、女性的生産物が相対的に高く評価されるということができであろう。高齢社会においては社会福祉重視型の経済システムを構築しなければならないと考えるならば、相対的評価がREMからよりREFの方向にシフトすることが求められる社会であることが説明されるであろう⁷。

7 このような評価基準のシフトは社会的効用関数のシフトによって生ずると考えられる。

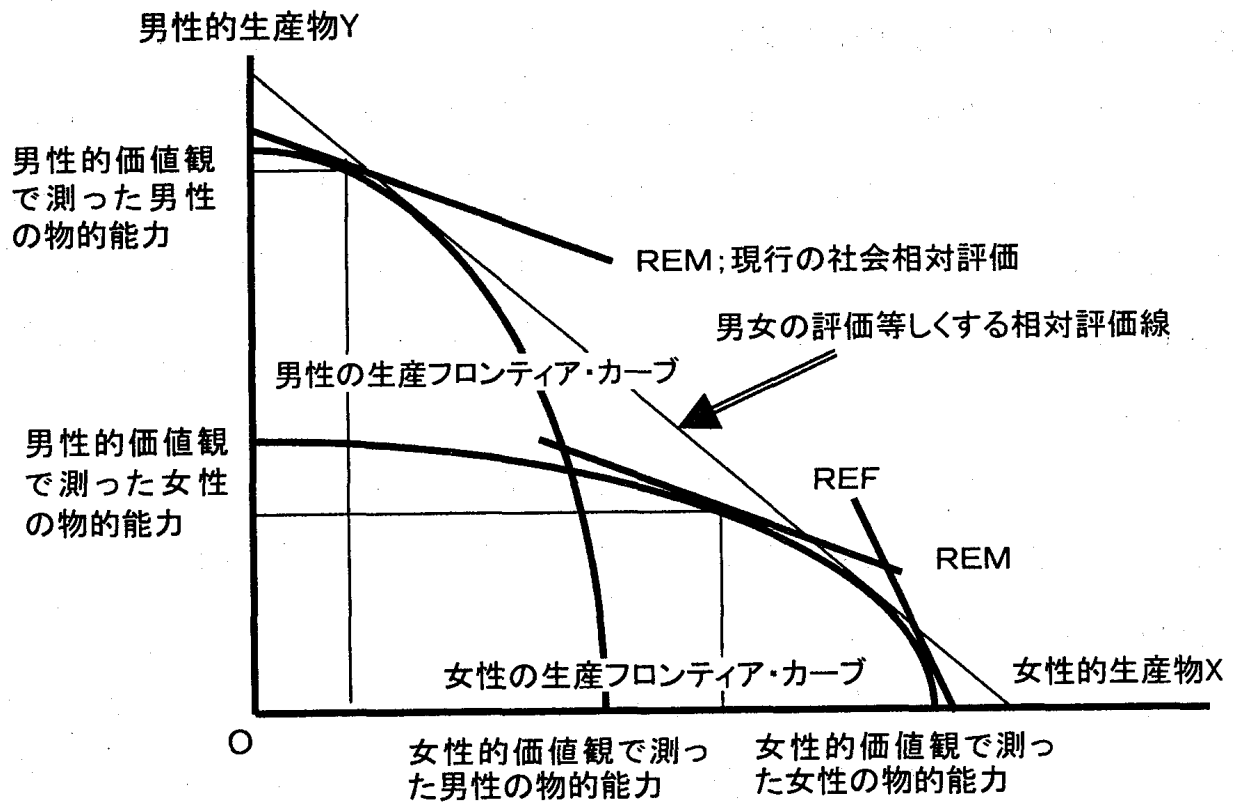


図4 男性と女性の相対評価

《格差の実績と評価》

「ビジネスや政治の世界で高い地位に就くのが圧倒的に男だということをもって、女性差別がなされてきたと結論付けるわけにはいかないのである。たとえば大企業の役員に女が少ないのは男のほうが私生活や他の興味は二の次で、何より仕事上の昇進を優先しがちだからであり、トップに登りつめるためには何事も犠牲にするという覚悟の違いは生物学的な性差に由来するのかもしれない」（参考文献2, p. 34）からである。

《キブツの実験》

キブツ活動は1910年にイスラエル社会において始められた社会的実験である。この実験は現代のフェミニストのイデオロギーに最も近い考え方に基づいている。すなわち、「女性開放のために必要かつ十分な条件は、性の役割を撤廃すること

等を日常生活の家事労働から開放することであるというのである」(参考文献1, p. 71)「キブツでは母親が世話する代わりに子は集団で保育され、しつけもおこなわれた。子供たちは年齢別に分けられた家で生活し、女を家事の義務から解放するために、共同の台所や選択室や食堂が作られた。男も女も好きな食業を自由に選び、政治の分野でも男女が対等に参加するように求められた」(参考文献1, p. 71~72)⁸。

しかし、「キブツ内での男女の分業の程度はそれ以外の集団よりも大きくなっているほどである」(参考文献1, p. 73)。すなわち、キブツ運動においては「逆戻り」現象が多く現れているのである。

すなわち、「キブツの実験が示しているのは文化の産物に過ぎないと普通考えられている性による役割の起源は、もっとずっと深いところにあるということである」(参考文献1, p. 73) ことが説明されている。

3. 社会的生産フロンティア・カーブの導出

経済全体における社会的生産フロンティア・カーブの導出について考える。

いま、女性的財・サービスの生産量を X とする。この社会的生産は女性的資源 L_X と男性的資源 L_Y によって生産されるとすると⁹、女性的財・サービスの社会的生産関数 F は次の(1)式のように表される。

$$X = F(L_X, L_Y)^{10} \quad (1)$$

8 キングスレー・ブラウン著「女より男の給料が高いわけ」において、人類学者のライオネル・タイガー(Lionel Tiger)とジョセフ・シェファー(Joseph Sopher)の研究であると説明されている。

9 この仮定はそれぞれの労働の成果について、他の労働投入量が外部経済効果を与えると考えることもできる。

10 女性的財・サービスの生産には、男性的資源は不必要であるならば、 $X = F(L_X, 0)$ と表され、等産出量曲線は横軸上に描かれる。

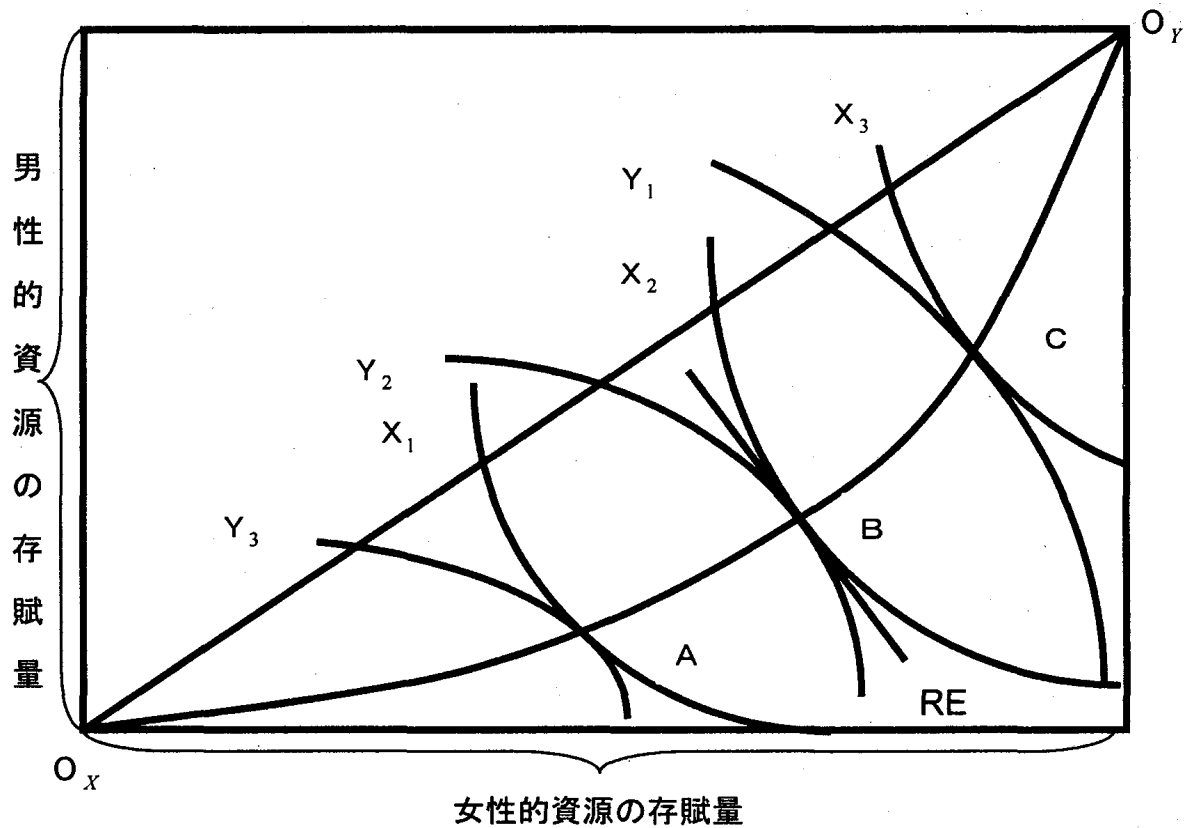


図5 RE; 相对評価 Relative Evaluation

この生産関数の等量線は図5のように左下のOを原点とした右下がりの曲線として表される。

次に、男性的財・サービスの生産量をYとする。この社会的生産は、男性的資源と女性的資源を投入することによって生産されるとすると、男性的財・サービスの社会的生産関数は次の(2)式のように表される。

$$Y = G(L_Y, L_X) \tag{2}$$

この生産関数の等量線は図5のY₁, Y₂, Y₃のように右上のO_Yを原点とした右下がりの曲線として表される。両等量線の接点(点A, 点B, 点C等)の軌跡が契約曲線である。この軌跡から図6のように社会全体の生産フロンティア・カーブを導出することができる。

《社会的生産フロンティア・カーブ》

図5の契約曲線から、図6のように社会的生産可能性曲線が導出される。横軸は女性的財・サービスの生産量、縦軸は男性的財・サービスの生産量である。また、任意の点における接線の傾きは、資源の相対評価（QE）を表している。

資本主義経済において、男性的財・サービスの多くは貨幣的交換の対象となるのに対して、女性的財・サービスの多くは貨幣的交換の対象とならないのであるならば、ここで表される相対評価は必ずしも市場において取引される相対価格ではないことになるのである。経済学におけるジェンダーの問題はここに発生すると説明されるのである。

すなわち、女性的財・サービスと男性的財・サービスの社会的評価の差異が、経済システムにおいて社会的に評価されることが少ないが故に、男性労働と女性労働は差別されているという問題が発生するのである。

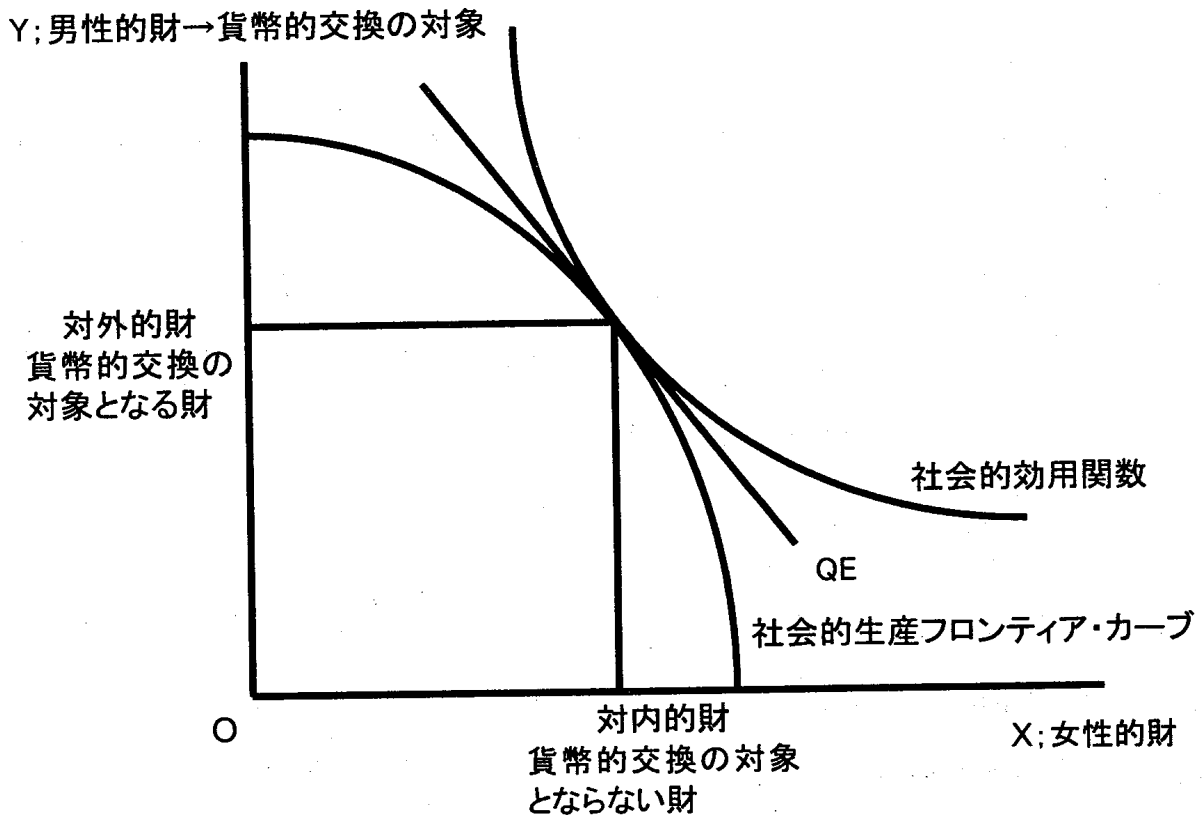


図6 男性的財と女性的財の生産フロンティア・カーブ

〈社会的効用関数〉

一定期間における社会全体の女性的財・サービスの消費量を X ，男性的財・サービスの消費量を Y とし，社会的効用関数を次の (3) 式のように想定する。

$$U = U(X, Y) \quad (3)$$

この社会的効用関数は，図6のU曲線のように表わされる。

現代社会が資本主義経済システムとして機能している限り，男性的財・サービスは相対的に高く評価されることによって，女性的労働は相対的に低く評価されているといえることができるならば，それは，社会的な効用関数が男性的財・サービスを高く評価するように形成されているからであると結論することができるのである。

すなわち，女性労働の評価をより高くするためには，①社会的効用関数の性質を変更することが重要となるのである。そのためには，②女性的労働に対する評価をより高くする方策が議論されなければならないのである¹¹。

4. むすびにかえて—経済学の限界とジェンダー—

本論文においては，人は一般に男性的資源と女性的資源を保有するものであると考え，各人がそれぞれの資源を効率的に活用する場が与えられた場合の生産フロンティア・カーブについて考察した。ここで，それぞれの資源は特有の貴重性を保有するものであり，格差の原因ではないことに注意しなければならない。

しかし，現代資本主義経済においては，市場経済における貨幣的交換を前提とするために女性的資源を活用した成果物は貨幣的交換の対象ではなく，家庭内に

11 家事労働のための電化製品の普及は，女性的労働に対する評価を相対的に低くしたと考えることができる。

においてのみ評価される財・サービスであるために、女性的財・サービスが社会的に評価される機会が少ないあるいは低く評価されることが説明されるのである。

それ故に、市場分析を前提とする既存の経済学においては、ジェンダーにもとづく経済現象は経済学的分析の対象とはならない場合が多いのである。

資本主義経済システムの中で男性的な能力と男性的な成果が評価されるシステムの中でジョン・ロック・フェラー・ジュニア (John D. Rockefeller Jr.) が言うように「大きなビジネスが成長するのは、最も適している者が生き残るという過程に過ぎない」(ピーター・シンガー著・竹内久美子訳『現実的な左翼に新化する』p. 22) ように、資本主義経済の成果を評価する基準で考えるならば、男性と女性の格差が次第に広がっているように見えるのである。しかし、「進化は道徳を背負っているわけではない」のであるから、資本主義経済における男女格差問題についての進化の問題は、道徳的な問題として改めて考察されなければならない問題であるだろう。

《本論文の結論》

この論文の結論は、次のようなものである。①経済学の分野において分析される人間の活動は市場交換を前提とした財・サービスの交換として表されるものであり、人々の日常生活の全ての営みから現れる現象の極めて限られたものであることが、ジェンダー研究における経済学の限界の1つであること。また、②社会的価値基準を「男性的価値基準」と「女性的価値基準」とに分けて考えることができるとするならば、資本主義経済においては社会的な評価として、男性的活動の成果を高く評価し、女性的活動の成果を低く評価する傾向が市場取引において大きく現れることが説明されること¹²。それ故に、③経済学は人間行動の経済的

12 このことは、直感的にも理解可能であるだろう。

側面だけを分析する学問であるという、経済学本来のもつ限界を理解することが重要であること。そして、④経済学的分析におけるこのような相対的評価は、決して人間一人一人について、男性か女性かの存在自身や活動の成果についての全評価ではないことを理解しなければならないのである。

《ジェンダーの改善と社会的生産フロンティア・カーブ》

女性労働がより高く評価される社会を構築することによって、社会的生産フロンティア・カーブは図7のより右上の曲線のように、より効率的な成果をもたらす曲線として描かれると期待することができる。これはジェンダーの状態の改善によって、生産面においては、資源配分の効率性がさらに進むことから生産フロンティア・カーブが右上にシフト・アップすることと社会的な評価が変化することによって、効用関数がより右下の方向にシフトすることによって、均衡点が点Eから点Fへの移動として説明される。

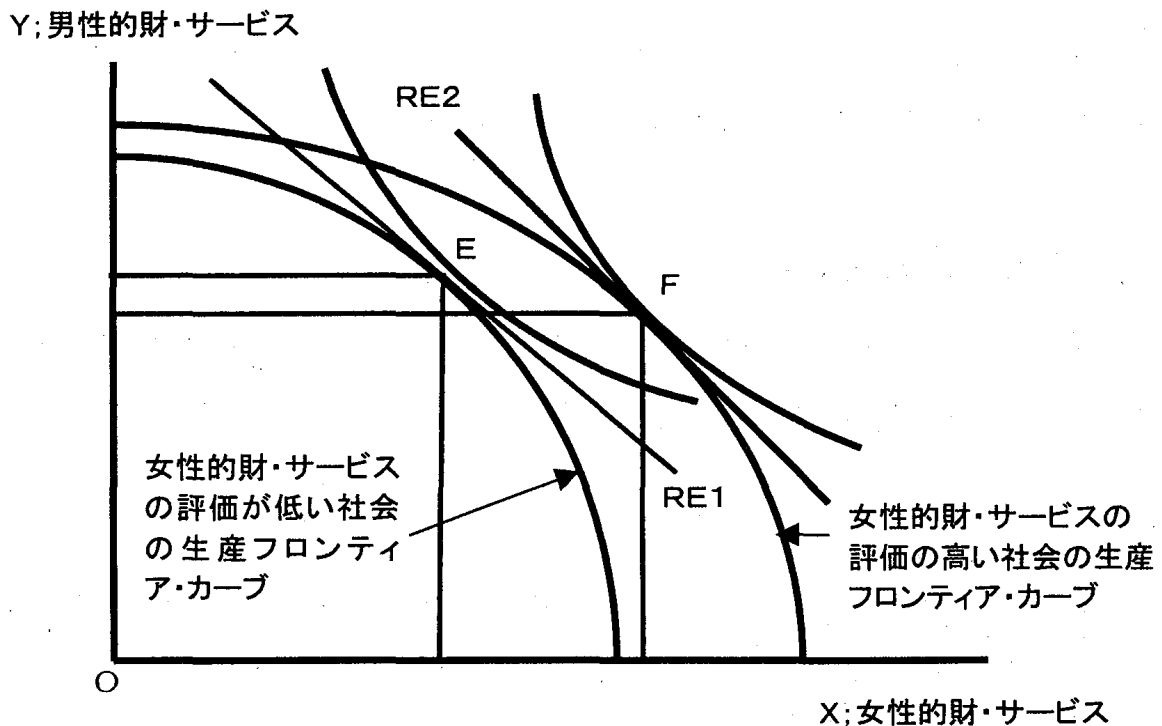


図7 ジェンダーと社会的生産フロンティア・カーブ

《ジェンダーを経済学的に考察するために》

経済学においてジェンダーを研究する為には、次のような、ピーター・シンガー著・竹内久美子訳『現実的な左翼に新化する』における、ダーウィニアン・レフトとしての注意書きを参考にすることが重要であり、興味深いものがある¹³。

- ① 人間の本性というものがあることを受け入れ、それについてもうちょっと知ろうとすること。そうすれば、人間はどのようなものかについての証拠のうち、最も利用できるものに基づいた政策が可能である。
- ② 「そういうのが本性である」から「それが正しい」へと決して推論しないこと。
- ③ 様々な社会的・経済的システムにおいて、多くの人々が地位を高めようとしたり、権力の座を得ようとしたり、あるいは自分と血縁者の利益を求めたりして競争するだろうと考えること。
- ④ その人が暮らしている社会的・経済的システムに関係なくお互いに協力し合うという純粋な機会があれば、たいていの人は肯定的に反応すると考えること。
- ⑤ 競争よりも協力が育む社会構造を展開させ、皆が望んでいる競争の終わりという方向へ事が進むよう協力すること。

《附記 — 進化論と経済学》

「理論的には——人間の本性についてなんら仮定していない抽象的理論からすれば——独占的な国有企業は最も安上がりに、最も効率的に公益事業をしたり輸

13 同時に、ダーウィニアン・レフトとして以下の三つのことをすべからずと説明していることも興味深い。

- ① 人間の本性の存在を否定すること。ならびに人間の本性は元々よいものである。あるいは限りなく、変えられると主張すること。
- ② 人間同士の対立や反目はすべてなくなると、政治変革、社会変革、あるいは教育の銃得実などの手段を問わず、期待すること。
- ③ すべての不平等が、差別や偏見、抑圧や社会条件に原因があると決めてかかること。それが原因であることもあるだろうが、すべての場合そうだとすることはできない。

送したりできるはずである。その点においてはパンを人々のもとに届けることについても同じだ。独占的な国有企業は規模という点で大変に有利だし、所有者に利益をもたらす必要もないのである」（参考文献1，p. 70）。

経済学においては、近代経済学もマルクス経済学も企業の独占状態をそれぞれの価値観から否定する。近代経済学においては、「市場の効率性の問題」と「市場の失敗」の議論との関係から説明される。マルクス経済学においては、階級認識の問題・搾取論・阻害論の関係から議論されるのであろう。しかし、このような経済学的説明とは独立して、生物学の進化論的な考察によると独占が経済システムとしてうまく機能しない原因は別の要因にあると説明されるのである。

すなわち、「私利私欲、いや、もっとはっきり言うなら、金持ちになりたいという欲求が人間を働くように仕向けるのだというお馴染みの考えを仮定に入れたとする。そうすると構図は一変してしまう」（参考文献1，p. 70）のである。「ある共同体が企業を所有していたとして経営がうまくいったとしよう。しかし、企業の責任者は自分が利益を得るわけではないのだ。こうして、自分たちの利害と企業のそれとが必ずしも一致せず、結果として、良くて非効率的、最悪の場合には汚職と盗みが蔓延することになりかねない。企業が民営化されると、所有者が経営上の実績に応じて報酬を受け取ることができるようになり、責任者は徐々に企業をできるだけ効率よく運営するようになっていくのである。これが人間の本性にあるいは少なくとも人間の本性の一つの見方に合わせて社会制度を作っていくやり方一つである」（参考文献1，p. 70～71）

しかし、ここで大事なことは、「自分の利益」とは何かという問題である。著者は、進化論的立場では、「私利と富は同じものとみることはできない」のであると説明している。なぜならば、「お金で幸せは買えない」という言葉には、言外に「金持ちになることよりも幸せになることにわれわれの関心があること」示しているからである。そしてこの「幸せになる」ということと進化論との間に因

果関係のある説明が期待されるのである。

《参考文献》

1. キングスレー・ブラウン著・竹内久美子訳 『女より男の給料が高いわけ』, 新潮社, 2003年2月.
2. ピーター・シンガー著・竹内久美子訳 『現実的な左翼に新化する』, 新潮社, 2003年2月.
3. 久場喜子編 『経済学とジェンダー』, 竹中恵美子・久場喜子編著, 叢書「現代の経済・社会とジェンダー第1巻」, 明石書店, 2002年3月.
4. 伊豫谷登士翁編 『経済のグローバリゼーションとジェンダー』, 竹中恵美子・久場喜子編著, 叢書「現代の経済・社会とジェンダー第5巻」, 明石書店, 2001年10月.
5. 拙著『ジェンダー学としての経済学成立のために』, 久留米大学「産業経済研究」, 第44巻第1号, 2003年6月.